

「増鏡」の成立年代

宮内三二郎

A Study on *Masukagami*

Sanjirō MIYAUCHI

1.

鎌倉時代 150 年の宮廷史を叙述する歴史物語「増鏡」が成立したのは、上限を元弘 3 年 (1333) または翌建武元年 (1334) とし、下限を永和 2 年 (1376) とする約 40 年の間の或る時点においてであった (増鏡は元弘 3 年の 6 月ごろまでの記事で終わっているから、成立はそれ以後のことであり、また、「永和二年卯月十五日」という奥書のある古写本のあったことがわかっているから、この時以前に成立したはずである)。

さらにすすんで、近時の通説では、本書は応安年間 (1368~74) から永和 2 年までの間に成立したであろう、とされている。つまり、上述の約 40 年間の最後の 8 年が成立期間であることになる。

しかし、この通説には、一つの根本的な疑問がある。それは、承久の変に幕府討滅・王政復古を企てた後鳥羽上皇の治世の記事にはじまり、元弘の変に後鳥羽院の素志を承継ぎ、これを実現した後醍醐天皇の、隠岐からの還幸と新政開始の記事で完結する増鏡が、なぜ、元弘から 30 年も経た時期、しかも建武の新政が約 3 年で破綻し、つづいて起った南北両朝の分裂と抗争の動乱期を経て、ようやく北朝・足利幕府の支配権が確立された時期に、着想され、起筆されたのか、という点である。

その点をしばらく措くとしても、私の見るところでは、通説の諸論拠 (それは意外にもわずか 3 個しか挙げられておらず、しかもそれらはいずれもきわめて不確実な、薄弱なものにすぎない) は、実はさらに一つの不確実な推測を前提としているようである。つまり、増鏡の作者は二条良基であろう、という古くから行なわれている推測を、暗黙の、または公然の前提とし、それにもとづいて良基の年令 (元応 2 年~嘉慶 2 年, 1320~88。元弘 3 年には 14 才、応安元年 46 才) を顧慮して、彼が増鏡を著わし得るほどの年令になったころ、また彼が増鏡と種々の点で類縁性を持つ宮廷儀礼・行事関係の諸小著作を著わしはじめたころ、に目星をつけ、これを裏づける徴証を増鏡の記事の内外に物色して論拠としたのが、応安・永和期成立説であると思われる。

論拠の一つは、「日本古典全書・増鏡」の「解説」で岡一男氏が提出された大要つぎのようなものである。増鏡「さし櫛」に、宗尊親王女掬子が、六条中将有房と通じたことや、龜山院妃位子 (新陽明門院) が、宰相中将兼嗣とその子頓悟房の 2 人に通じたことを記したのち、語り手の老尼が、「……………このころの人の御有様も、おのづから軽きことあらば……………」と言い、聞き手が「いづら、

このころは誰か悪しくおはする」とたずねたのに対して、老尼は、「いないな、それはそら恐ろし」と言って頭をふった、とあるのに注目して、「このころ」すなわちこの記事の執筆当時（元弘3年以後、永和2年以前）に実在したであろう不行跡な皇妃は、「大日本史・后妃列伝」に記された後光厳天皇の晩年の寵妾日野資名女二品の局であろうとして、上の記事（ひいては増鏡全篇）の成立時期を、後光厳院の崩御の応安4年以前の応安初年と推定されたわけである。老尼が恐れて名を挙げなかったのは、二品の局の相手の藤原懷国が、「勢ひをたのんで同列を凌忽するといふやうな乱暴者であったから」であろう、とされた（10～12 ページ）。

だが、木藤才蔵氏も指摘されたように（「増鏡の作者・下」《『国語と国文学』昭37.12》）、不行跡の皇妃は、たまたま「后妃列伝」に記されたこの二品の局以外にはなかったかどうか、「事の性格上、はっきりしにくい」。現に私の見出し得たところでは、「園太暦」の文和2年（1353）6月4日（すなわち上記の応安初年よりも16, 7年以前）の条に、風聞として、同年2月、後光厳天皇の女御（北畠親房女）が「逐電」したが、これはいわゆる「正平一統」の際に南朝の特使として京都に乗りこんだ中院具忠が密通、掠取したもので、このことを親房が憤って賀名生（当時、南朝の行宮のあった地）の土民4, 5人（同女御をかくまった者どもでもあろうか）を斬って梟首したところ、土民がこれに反抗して蜂起した、と記されている。同じ後光厳帝の妃妾にしてもむしろこの方が増鏡の記事（「いないな、それはそらおろそし」）によりふさわしいほどである。

また、たとえば後醍醐帝には、その皇子女を生んだ者だけをとってみても、すくなくとも20人の妃妾のあったことがたしかであるが（「本朝皇胤紹運録」による）、この20人の中には、あるいは貞淑ならざる女性も一人や二人はあったのではないかと想像することも許されないことではあるまい。「大日本史・后妃列伝」（後醍醐妃21名を挙げている）に格別そのような記事がみられないことは、「大日本史」そのものの編述の性格からいっても、必らずしもそのような人物が皆無であったことを物語っているわけではなからう。

岡氏がこのようなただ一つの、しかも甚だ心もとない執筆年時徴証だけを根拠として、応安末成立説を唱えることができたのは、「……それでわたくしは増鏡を後光厳院の応安末に成立したのであらうと思ってる。二条良基の五十代の初めの著作であらう」という結論の言葉によってもうかがわれるように、同氏が、増鏡を二条良基の壮年期以後の著作であると確信しておられたことによるものであろう。（なお、「皇妃列伝」にいう藤原懷国は、「後光厳院御幸始記」・「貞治二年御鞠記」・「貞治六年中殿御会記」等に、「藤原懷国六位判官代」・「六位藏人懷国」などとしてみえているのがそれであろうが、増鏡の語り手の老尼《ひいては作者》が、その相手の名を口にするのを憚るほどの人物とは思えない）。

第二の論拠は、石田吉貞氏が「増鏡作者論」（『国語と国文学』昭28.9）で提出されたもので、石田氏は、上述の岡氏説を「一応肯定」した上で、「応安の末頃に『さし櫛』のあたりを書いてゐたと仮定」すれば、「完成したのが丁度永和二年頃になると考へられる」とし、「応永本の奥書にあった『永和二年卯月十五日』といふ日附」は、「良基と考へられる作者が増鏡を撰筆した時の日附ではな

からうか」とされた。

忌憚なく言えば、この説は岡氏説にもまして説得力に欠ける。これについては松村博司氏も、「果して作者が擲筆した時に日付を書いたかどうか疑がわしい点も残るのであるが………」と評されたが（『歴史物語』259 ページ）、「永和二年卯月十五日」を、作者自身が記した擲筆の日附であるとするには、単なる臆測以外に何の裏付けもない。またこの説は、かのきわめて不確実な岡氏説を前提としているだけでなく、この説の通りとすれば、「第十一・さし櫛」から「第十七・月草の花」までの執筆に2カ年を要したことになり、この見積りにも何一つ裏づけがない。要するに石田氏説は、岡氏説とまったく同様に、作者良基説を根本的な前提とし、もっぱら良基の年令の点から、かの増鏡の成立年代の期間（元弘3年～永和2年）を、その下限のころへ限局しようとするものであると言える（「……良基は、増鏡成立年代の下限永和二年に五十七才であり、その文学活動は主としてそれ以前に行はれてゐるのであるから、増鏡もそれ以前に書かれたものとして最も妥当である」〔前掲論文〕）。

第三の論拠は、木藤才蔵氏の提出されたところである（『日本古典文学大系、神皇正統記・増鏡』解説）。木藤氏は、「増鏡の作者を良基と想定した上で、良基が増鏡のような作品を書く必然性があった時を求めて」、その時期を、「朝廷の重臣となって朝儀を起こす」という宿願を抱いていた良基が、「実力者である足利将軍に働きかけて、その協力を得」ることが可能になったころ以後、つまり、「あいつぐ戦乱も次第におさまリ、将軍の地位もやや安定するに至った二代将軍義詮の晩年」のころ以後とみ、さらに義詮の死没（貞治6年すなわち応安元年の前年）後の幕政の事情をも考え合わせて、「応安初年から永和二年に至る約六、七年間」が成立年代として「最も可能性が高い」とされた。

たしかに増鏡には、歴朝の儀礼・行事の模様が事こまかに記されてはいるが、しかし本書は、朝儀・行事の書ということではとうてい律しきれない多面的な内容を含んでいる。仮りに作者が二条良基であり、またその良基が朝儀復興の宿願を持っていたにしても、そのことを本書の述作の動機や成立時期の問題に結びつけることには、木藤氏の説かれるような「必然性」は認めにくいのではなかろうか。何よりも本書が、元弘3年の後醍醐帝の新政開始の時点で筆を収めていることが、木藤氏説に対する反証となるだろう。同帝は朝儀の再興に大きな関心を持ち、還幸後1年にしていちはやく有職書「建武年中行事」3巻を撰しており、また事実、改元を行ない、大内裏造営を計画し、仁寿殿三席御会、中殿両席御会その他の歌会や御遊をしきりに催したが、もし良基が朝儀復興の念願にもとづいて増鏡を述作したとすれば、この建武年間の諸儀礼・行事に触れることなく稿を閉じているのは、まったく不可解というほかはない。

以上みてきたように、応安末・永和初年成立説は、その論拠はいずれもきわめて薄弱であり、またいずれも二条良基作者説を確定的とみなし、これを前提として主張されているものである。そして、〈作者は良基〉という先入観に支配され、それに依存しすぎたために、おもに良基の年令から考えて、彼が本書を著わす可能性のあった時期は何時であったか、ということで本書の成立時期を

見定めようとし、またそのために、別の時期に成立したことを示唆する徴証を黙殺して、わずかに、二の、しかも説得力に乏しい推測材料を見出したことで満足する、という結果となったようである。(たとえば、岡氏は、後述のように、「第十二・浦千鳥」と「第十五・むら時雨」の中に見出される2個の徴証について、「本書を建武ころのものとするにふさわしい」と言われた《前掲書9ページ》)。これは同氏の応安末成立説《12ページ》とどのように結びつくのか、同氏は一切言及しておられない。

そこで私はまず、作者の問題を棚上げして、もっぱら作品の内部に徴証を探って、成立(執筆)年時の推定をこころみることとする。

2.

「第十四・春の別れ」に、

まことや、例の先にきこゆべきことを時たがへ侍にけり。兵衛督為定、故中納言のあとを受けてえらびつる撰集のこと、正中二年十二月のころ、まづ四季を奏するよしきこえし残り、この程世にひろまれる、いとおもしろし。御門、ことのほかにめでさせ給て、続後拾遺とぞいふなる。中宮大夫師賢うけたまはりて、このたびの集のいみじきよし、さまざまおほせつかはしたる御返に、為定、……、御返し、内の御製、……

という記事がある。従来この記事は、成立問題の論者によってとりあげられたことがないように思う。

「続後拾遺集」の「残り」の部分が奏覧されたのは、正中2年の翌年の嘉暦元年(1326)のことであつたらしい。「勅撰次第」には「嘉暦元年六月九日返納歟」とある由であり(「日本古典文学大系」本・頭注)、上掲の文中にみえる花山院師賢が「中宮大夫」であつた時期も、正中2年から嘉暦2年2月までであつたから(「公卿補任」)、嘉暦元年は動かぬところであろう。

ところで当時、一般に、勅撰和歌集が撰進されたのち、それが「世にひろま」るのに、どれくらいの時日がかかったものなのか、もとより確実なことはわからないが、常識的に言って、1、2年か、せいぜい2、3年だったのではなかろうか。どんなに長く見積っても5年以上もかかったとは思えない。そうだとすれば、「続後拾遺」の場合、それが「世にひろま」りはじめたのは、嘉暦2、3年から元徳年間(1329~31)へかけてのころだったのではあるまいか。またそうすると、そのことを、「この程世にひろまれる、いとおもしろし」と記した増鏡「第十四」の記事も、この嘉暦・元徳のころか、またはそれにごく近い時期に書かれたことになるろう。

しかし、これにはなお他に考慮に入れるべきことが一つある。それは元弘元年(1331)8月に勃発した元弘の変と、後醍醐帝の敗北・隠岐配流、持明院統の光厳朝の成立、という政情である。この時期(後醍醐帝が隠岐から還幸して新政を開始した元弘3年6月、すなわち増鏡の最終記事の時点までの)においては、朝野を通じて、勅撰和歌集、殊に後醍醐帝の勅命・二条派の為定の撰進になる「続後拾遺集」が、よろこんで迎えられたり、落ち着いて鑑賞されたりするような状況にはな

かった、とみななければならない。(為定その人も、後醍醐帝方とみなされて幕府側の取り調べを受け、身柄を祖父大納言入道為世に預けられた。増鏡の作者もその一人であったらしい二条派の歌人たちは、京極派を支持する持明院統の光厳朝にあっては鳴りをひそめていたであろう)。

だが、やがて状況は再び一変した。後醍醐帝の復位とともに、先にもすこし触れたように、朝儀行事がさかんに興され、「統史愚抄」に記載されている限りでも、元弘3年9月、翌建武元年正月、7月、8月、9月、建武2年正月、と内裏で歌会が催されている。このほかにも建武2年には内裏千首歌の催しがあり、二条為世、為定をはじめ、兼好・頓阿・浄弁らの二条派緇流歌人も詠進した(「兼好家集」, その他)。また為定は元弘3年5月、前職(権中納言)に返り咲き、翌年正月には正二位にのぼり、この建武新政期の歌界の主導的地位についた。

この時期すなわち建武元、2年のころこそは、後醍醐帝の勅命によって為定が撰進した勅撰和歌集たる「統後拾遺集」が、「世にひろま」り、もてはやされたであろう時期である。私は、かの「第十四・春の別れ」の記事は、まさにこの建武元、2年のころ(おそらくは建武2年)に執筆されたであろうと推測する。

なお、かの応安・永和期成立説は、この徴証記事からしても、きわめて不審である。応安年間には統後拾遺集撰進のころからすでに40年を経ているのであるから、第14巻というくだんの記事の位置を勘定に入れても、そのころに同歌集のことを、「この程世にひろまれる」と書いたとすれば、それはいかにも不自然である。まして同集のつぎの勅撰集である「風雅集」(周知の通り、その歌風は、前者の二条派風とは異なり、京極派風である)は、貞和元~4年(1345~48)に成ったが、増鏡の作者が、この風雅集の成立以後に、統後拾遺集のことを、「この程世はひろまれる」などを書くというのは、およそ信ぜられないことではなかろうか。

3.

「春の別れ」のつぎの「第十五・むら時雨」に、元徳3年(1331)3月の、後醍醐帝の北山行幸の記事があるが(注)、その記事の中途に、

その日のこと見たまへねば、さだかにはなし。幼きわらはべなどの、しどけなく語りしまなり。このうちに御覧じたる人もおはすらむ。うけたまはらまほしくこそ侍れ、といふ。

と、語り手の老尼の言葉がはさみこまれている。作者が一体どんなつもりでこれを挿入したのかは、詮索を要する問題であるが、それはさて置き、この一文は、元徳3年の北山行幸の時からどのくらい経って書かれたものなのだろうか。「その日のこと見たまへねば……。このうちに御覧じたる人もおはすらん」というのは、その日から3、40年も経った応安・永和のころに書かれそうなことではない。これはやはり「その日」から2、3年またはせいぜい4、5年後のころ、すなわち前節で論じた「この程世にひろまれる」の場合と同じく、建武初年ごろの執筆とみるべきであろう。

同じことが「第十二・うら千鳥」の末尾にみえる、文保元年(1317)の、花園天皇の二条富小路

の内裏へ遷幸の記事中の、

近き事は人皆御覧ぜしかば中々にてとゞめつ

という老尼の言葉についても言える。文保元年から5, 60年も経った応安・永和のころに、「近き事は人皆御覧ぜしかば」と書くということは、まず有り得ないだろう。したがってこの記事も第十二巻巻末というその位置からいって、前記の第十四、第十五とほぼ同じく、建武初年のころの執筆と思われる。応安末成立説をとられる岡一男氏も、上述の2証例については、「本書を建武のころのものとするにふさはしい」と言われた（前出）。建武初年ならば、文保元年から17, 8年の後であり、「近き事は……」と書いてもまず不都合はないだろう。

注。この記事の内容と、「舞御覧記」（『群書類従』所収）のそれとの（および両書の序の部分の）間には密接な関係があることはよく知られており、増鏡が舞御覧記を素材として大巾に利用したと考えられているが（平田俊春氏「増鏡の成立——舞御覧記との関係について——」（『吉野時代の研究』所収）等参照）、私は、そうではなくて、両書の作者は同一人物であり、執筆の時期もあまり隔ってはいなかったであろう、と確信する。しかし、この点の論証は別の機会にゆずる。

4.

「第十六・久米のさら山」（前節でとりあげた「第十五・むら時雨」のつぎの巻であり、また本書の最後から二番目の巻にあたる）の末尾に、つぎのような、本書の成立時期の推定にとってきわめて重要な一節がある。

内光厳には女御もいまださぶらひ給はぬに、西園寺の故内大臣殿実衡の姫君、広義門院の御かたはらに、今御方とかやきこえて、かしづかれ給を、まいらせ奉り給へれば、これや后がねと、世人もまだきにめでたく思へれど、いかなるにか御覚えいとあざやかならぬぞ口惜しき。三条前大納言公季の女秀子、三条とてさぶらはるゝ御腹にぞ、宮宮あまた出でものし給ぬる、終のまうけの君にてこそおはしますめれ。

これについて岡一男氏は、

和田英松博士が「増鏡の研究」（改造社版日本文学講座所収）で指摘されたやうに、「久米のさら山」に、光厳天皇の皇子たちがあまた三条の御腹にお生まれになったことを記しているが、これは建武・延元以後のことであるから、本書が延元三年（暦応元年）以後に成立したことがわかる（前掲書10ページ）。

と言われ、木藤才蔵、松村博司氏もこれを支持しておられる（いずれも前掲書）。この点を検討し直してみよう。

まず、くだんの一節の執筆時期の上限はいつであろうか。大体この一節の主旨は、〈西園寺実衡の女「今の御方」は、光厳帝の寵が薄いのは残念だが、三条公秀の女三条の腹に御子が数多く生ま

れ、結局その中から皇太子が立たれるようである〉、というものであるが、三条所生の光厳院皇男子は、「本朝皇胤紹運録」や「後嵯峨院皇統系図」によれば、建武元年（1334）生誕の興仁、暦応元年（1338）生誕の弥仁の2皇子しかない。もっとも「続史愚抄」に弥仁皇子が「院第三皇子」と記されているところからすれば、興仁皇子のつぎに第二皇子があったわけであるが、諸記録にその名が見当らず、おそらくは早世したものと思われ、生母が誰であったかも不明である。また「仁和寺御伝」と「諸門跡譜」によれば第四皇子恵仁（尊朝）は康永3年（1344）の生誕であるが、これも生母の名の記載がなく、おそらく三条所生ではあるまい。

そこで三条所生の皇子が、興仁・弥仁の2人だけであったとすれば、「宮宮あまた」の「宮宮」を皇男子に限定するかぎり、これを「あまた」と言うのは不適切と思われるから、前記の「第二皇子」も三条所生とみて計3人を指すと考えるほかはなからう。

しかしもともと「宮宮」という語は、必ずしも皇男子だけを意味するとはかぎらない。たとえば増鏡の直接の先行作品である「今鏡」の「藤波の上、第四」に、

……………弘徽殿の中宮姫子と申しき。……………いつしか宮宮生み奉りてあへなくかくれ給ひにし……………

とあるが、この「宮宮」は後朱雀院の皇女たち（祐子と祿子の両内親王）2人を指すことは、そのあとにつづく記事によって明らかであり、「紹運録」によってみても、中宮姫子所生はこの2皇女だけである。

他方、「続史愚抄」の正慶2年（1333）正月9日の条に、

今上第三皇女降誕。母典侍藤原朝臣季子按察使公秀女

とあり、興仁皇子の誕生（建武元年4月22日）の1年3カ月ほど前に、三条所生の第三皇女が生まれていたことがわかり、また三条は多産であったと思われるから（1年3カ月の間隔であるから上記2人は年子に近い）、第一、二皇女（またはそのうちの1人）もやはりこの三条の所生ではなかったか、と想像することも可能である。

またそうすると、かの増鏡の「宮宮あまた」は、皇子・皇女の両方を含めて言ったものと考えることができ、「宮宮あまた出でものし給ひぬる、終のまうけの君にてこそおはしますめれ」という文が書かれたのは、あながち第三皇子弥仁の生まれた暦応元年（1338）以後でなければならないというわけではなく、第一皇子興仁の生まれた建武元年（1334）4月以後とみることも可能であることになる。

だがかの一文は、やはり三条所生の皇男子が、すくなくとも2人は生まれていたことを思わせる。それは第一皇子興仁と第三皇子弥仁の2人であったかもしれないし、また興仁皇子とかの不詳の第二皇子の2人であったのかもしれない。しかし、このことを別にしても、建武元年といえば、まさに後醍醐天皇の復位・新政開始の頭初ころであり、この時期に、前年5月退位した光厳上皇の皇子の立太子を予想すること（「終のまうけの君にてこそおはしますめれ」）は、作者にかぎらず当時の一般世人にとっても、まず以て不可能であったろう。事実、興仁親王生誕の3カ月前の建武

元年正月23日には、すでに後醍醐帝の第三皇子恒良親王が皇太子に冊立されている（「統史愚抄」）。従ってこの建武元年のころには、光厳院皇子興仁の前途は、立太子どころか、まったく暗澹たるものであったろう。また従ってかの増鏡の一文は、建武元年のころにはまだ書かれていなかったはずである。

つぎに、後醍醐帝の新政は2年余で瓦解し、建武3年（延元元年、1336）8月15日、足利尊氏は光厳院皇弟豊仁親王（光明）を擁立した。後醍醐帝は11月2日、光明帝に神器を譲ったが、同月14日、尊氏の奏請によって、後醍醐帝皇子成良親王が新帝（光明）の春宮に立った。（前坊恒良親王は、これよりさき、同年10月10日に新田義貞らに奉ぜられて北国に赴いた）。それゆえこの時期すなわち成良親王が光明天皇の皇太子となった建武3年（延元元年）11月ごろにも、まだかの興仁皇子の立太子を予想し得るような事態は、全然生じていなかったとみなければならない。

しかしつぎに、同年12月21日、後醍醐帝はひそかに京を脱出して吉野に籠り、ここに南北両朝の分裂・抗争の時代がはじまった。殊に、翌延元2年4月初旬（5日以前か）、北朝では成良親王の皇太子を廃した。（また前坊恒良親王は、捕えられてこの月、花山院第に幽閉された）。この成良親王の廃太子の日、すなわち北朝・持明院統の光明天皇の春宮が空位となった日こそは、光厳院皇子興仁の立坊を予想できるようになった時期、またしたがってかの「つひのまうけの君にてこそ……」の一文の執筆時期、の上限とすべきであろう。作者は、上述のような建武元年正月から同4年4月までのわずか3カ年の間に、状況の変転と帝位の交替に伴って2人の東宮が立ちまた廃される、というきわめて異例の事態をまのあたりに経験したからこそ、「つひの（まうけの君）」という感慨をこめた表現をしたのであろう。（なお、光明天皇はこの時まで17才で、しかるべき皇子はなかったとみられる。また同天皇の皇子女は、「紹運録」によれば、終生「周尊」という人物ただ1人だったらしい。それゆえ、この時期には皇太子候補たり得る人物は光厳院皇子興仁以外にはなかったであろう）。

それではかの一文の執筆時期の下限はいつであろうか。「……にてこそおはしますめれ」という表現は、立坊の可能性が色濃くなったか、またはほとんど確定的となった時期で、しかもまだ実現をみるには至っていないころの筆であろうと思われる。通説はこの点を不問に付しており、岡氏の場合、前述のように「第十二」、「第十五」の記事を、「建武のころにふさわしい」としながら、この「第十六」の末尾の一節の執筆を、「延元三年（暦応元年）以後」とだけ言い、結局、「第十七」までの全巻の成立は、延元年から20年も経った応安（1368—）以後と推定されたのであった。

ただし、かの一節のすぐ前の個所には、

《日野俊光》文保の比はじめて大納言になりしを、いみじきことに時の人いひ騒ぐめりしに、その子《資名》、このころ……又大納言になりぬ。めでたく度をさへ重ねぬる、いといみじかめり。前の世にも、定房一品し、宣房大納言になされしなどせしをば、かうざまにぞ人思いふめりし。

とあって、助動詞「めり」がしきりにつかわれていて、その場合は単に過去の事実について婉曲

に言っているにすぎないのであるから、その点だけからすれば、「終のまうけの君にてこそおはしますめれ」の「めり」も、未来の推量ではなく、既定の事実についての単なる婉曲な表現とみられないことはない。そうすれば、これは立坊実現後の筆であってもかまわないわけである。

しかし、ここには見のがせない相違点がある。上記の3例の「めり」は、俊光・資名・宣房がそれぞれ大納言になったという過去の事実についての、当時の世評や作者自身の感想を婉曲に言い表わしたものであるが、「……の君にておはしますめれ」の「めり」は、三条の腹に御子があまた生まれたという過去の既定の事実そのものに関してではなく、その事実の後に生ずるであろう立坊という事態に対して用いられているのであるから、これはやはり作者あるいは一般世人の予想・期待を言っているものと思われる。作者は、上掲の文章の場合も、執筆時以前の過去の事実そのものに対しては、「なりにし」・「なりぬ」・「重ねぬる」・「せし」・「給ぬる」とすべて過去（既成・完了）を表わす助動詞を使っているのであるから、立坊が実現したのちの筆であるならば、もっとちがった書き方をしたであろう。上掲の文中にみえる「いひ騒ぐめりしに」という表現からすれば、「……にてこそおはしますめりしか」とでも書かれたはずではなかろうか。

そこで、くだんの一節は、前述の上限の建武4年4月から、下限の建武5年（暦応元年）8月（興仁親王春宮立坊）までの、1年半たらずの期間中に執筆されたことになる。建武5年3月2日には、第三皇子弥仁（母三条）が生誕しているから、「宮宮」には皇男子がもう一人加わって、「あまた」という表現がいっそうふさわしいものになる。この点を考慮に入れると、最も蓋然性の大きい執筆時期は、建武5年3月2日の弥仁皇子生誕以後、同年8月13日の興仁親王立太子までの5カ月間ということになるだろう。

次節で述べるように、この期間中には、新田義貞の戦死（閏7月2日）、足利尊氏の征夷大將軍宣下（8月11日）という、最終巻「第十七・月草の花」の記事の執筆時期の問題に関係のある出来事も起っており、この建武5年（暦応元年）が、「第十六」・「第十七」が執筆されて全巻が完結した時期であることの蓋然性は、いっそう高まるのである。

5.

「第十七・月草の花」につぎのような一節がある。

さる程に、あづまにてもかねて心しけるにや、尊氏のすゑの一ぞう新田小四郎よしさだといふ物、いまの尊氏の子四になりけるを大將軍にして、武蔵国よりいくさをこしけり。このころのあづまの將軍は、もりくにの親王にておはします。

かつて和田英松氏は、上の文中の「いまの尊氏」に注目し、増鏡の成立の下限を尊氏死去の延文3年（1358）とされたが、これに対して石田吉貞氏は、前掲論文の中で、増鏡の記事においては、「いま」は必ずしも執筆時における「いま」を示しているとはかぎらない、としてこれを否定された。しかし、この問題ももう一度考え直さるべきであろう。なぜなら、この場合、「いまの尊氏

……」のつぎには、「このころのあづまの將軍……」とあって、「このころ」という記事内容の時点（すなわち元弘3年の新田義貞の鎌倉攻めの当時）を示す言葉がつづくのであって、「いまの尊氏」の「いまの」は、むしろこの「このころの」と対比的に用いられている感じがあり、まさに執筆當時を指して言っているのではないか、と思われるからである。

たしかに増鏡の場合、「いま」は記事の執筆當時をさすのでなく、記事に取り上げられている時期をさしている。目についたかぎりを拾い出してみると、つぎのようなものである。（あるいは見落しがあるかもしれないが、ほぼ全部を挙げつくしたつもりである）。

1. 《後鳥羽院》，建久九年正月，第一の御子《土御門》四になり給に，御位ゆずり申させ給て，おりゐ給。……いまの御門《土御門》の御いみなは為仁と申しき。（おどろの下）
2. いまの摂政は，後鳥羽院の御時の関白基通のおとゞ，その後は後京極殿ときこえ給し……。 （同上）
3. もとの御門土御門，ことしは十六にならせ給ば……新院ときこゆ。父の御門後鳥羽をば今は本院と申。……。いまの御門順徳は十四になり給。（同上）
4. 昔，躬恒が御階のもとに召されて……いまの代の秀能は，ほとほと古きにもたちまさりてや侍らん。（同上）
5. その世のことかたじけなくなむ。今もすこし，世の中隔たれるさまにてのみ……。 （同上）
6. 時政は……故大將のありし時より……，まいて今は孫の世なれば……。 （新島守）
7. さて，今はひとへに実朝，故大將の跡をうけつぎ……。 （同上）
8. 前の殿家実の御女，……いまの峯殿なり返給へれば……。 （藤衣）
9. 三条殿は安喜門院，中の度のは鷹司院とぞきこえける。今の女御もやがて后だちあり。（同上）
10. 嘉禎三年よりは岡の屋の大臣，摂政にていませしかば，そのまゝに今の御代のはじめも関白ときこえつれども……。 （三神山）
11. 《父の太政大臣公経》，よろづ世中御心のまゝに……。今の右の大臣実氏をさをさ劣りたまはず……。 （内野の雪）
12. 古くは……，近くは……月輪殿，これぞやがて今の峯殿の御祖父よ……。 （同上）
13. もとの將軍頼嗣三位中将は，その四月に都へ上り給ぬ。……さて今下り給へるを……。 （同上。ただしこの記事は「二十卷本」のもので、「十七卷本」にはない）
14. 故時頼朝臣は……。それが子なればにや今の時宗朝臣も……。 （草枕）
15. もとの上後宇多は，……。いまの御門伏見も……。 （老のなみ）
16. おりゐの御門花園は……。今の上後醍醐は……。……今の後の御方へ……。 （秋のみ山）
17. 山の前座主にて今は大塔の二品法親王尊雲ときこゆる……。……妙法院の法親王尊澄ときこゆるは，今の座主にて物し給へば……。 （むら時雨）

18. たゞ今の將軍は、むかし式部卿久明親王とて下り給へし將軍の御子也。守邦の親王とぞきこゆる。(同上)

19. むかし八幡の行幸ありし時、橋渡しの使なりし佐々木佐渡の判官といふ物、今は入道して、今日の御送りつかまつれるに……。 (久米のさら山)

20. 高時の入道弟に四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ大将に下しける。(月草の花)

以上、煩を厭わず列挙したことには理由がある。これらの諸用例の場合の「今」は、一つの例外もなくすべて、或る人物や事柄を、過去における或る人物や事実との比較や関連において、相対的に「今」(すなわち記事にとりあげられている時代)と言っているのであって、〈昔〉・〈前〉に対しての〈今〉である。ところが、この20個例に対して、先掲の「今の尊氏」の「今の」は、一見過去の人物や事実とはなんの関係もなく、唐突に言い出されている。しかもすぐ前に、「尊氏の末の一族……」と言っておきながら、またあらためて「今の尊氏……」と書いているが、これは、「今の」を省くか、「この」に代えるかして、〈尊氏の末の一族新田小四郎義貞といふもの、(この)尊氏の子四になりけるを大將軍にして……〉、と書く方がよほど自然である。作者はなぜすぐ前にも出した尊氏の名に、わざわざ(むしろおそらく無意識的に)「今の」を冠したのだろうか。

20個所に及ぶ「今」の用例が、すべて〈昔〉・〈前〉に対しての「今」である以上、「今の尊氏」の「今」も、たとえ文の表面には表われていないにしても、またたとえ作者ははっきり意識してはいなかったにしても、やはり過去の何かに対しての「今の尊氏」を意味していたに相違ない。その「何か」は何であろうか。前掲の諸証例における、「いまの御門」「いまの摂政」「ただいまの將軍」等の「いまの」から推して、「このころのあづまの將軍は、守邦の親王にておはします」がそれであるらしく思われる。

この一文は、実はこれもまたすでに「むら時雨」で、「たゞ今の將軍は、……守邦の親王とぞきこゆる」(前掲18)、と書かれていることの繰り返しであるが、もともと作者は將軍(征夷大將軍)の地位に対しては、帝位や摂政・関白の地位に対するのと同様の強い関心を持っていて(執権に対してもほぼ同じ)、頼朝—頼家—実朝—頼經—頼嗣—宗尊親王—惟康親王—久明親王—守邦親王—護良親王とつづいた歴代將軍の、特にその交代の経緯を一つも洩らさずに記している(第2～6, 7, 11, 15, 17の各巻)。そこで、かの「いま」は、「このころ」(記事内容当時)に対しての、執筆當時をさすのであって、「いまの尊氏」は、「このころのあづまの將軍、守邦親王」に対しての、〈いまの將軍尊氏〉を意味していたのではなかろうか。もしこの推測が当たっているとすれば、かの一節の執筆時期は、かつての和田博士の推定の通り尊氏の没年の延文3年(1358)以前であるだけでなく(執筆時期の下限)、尊氏が征夷大將軍となった暦応元年(1338)8月以後(執筆時期の上限)であることになる。

さらに推測をもう一步進めて、作者がまったく例外的に、執筆當時をさす語としての「いま」を、思わず「尊氏」の上に冠しそうな時期は何時であるかを考えてみると、それはまさに尊氏が征夷大

將軍に補せられた暦応元年（8月以後）か、その翌年ごろではなかろうか。

北条氏の滅亡（將軍守邦親王は同時出家）の後、建武親政開始時に後醍醐帝は、尊氏を鎮守府將軍に、ついで護良親王を征夷大將軍に（元弘3年《1333》6月。「大塔の法親王……すみやかに將軍の宣下をかうぶり給ぬ」——《増鏡・月草の花》）、それぞれ任命した。護良親王の失脚後、同年11月後醍醐帝の第3子成良親王が後を襲ったが、延元元年（1336）2月これを罷め、以後南北朝方の死闘の間、征夷大將軍は空席となっていた。そして、諸国の南朝勢がふるわず、新田義貞が越前藤島の戦に戦死して、北朝・尊氏方の優勢がようやく決定的となった暦応元年8月11日、尊氏はついに光明天皇によって征夷大將軍を宣下されて、名実ともに武家の統領となった。

義貞は、鎌倉攻略の功によって後醍醐天皇方の第一の武将として上下の声望をあつめていたが、尊氏の離反後、その宿敵として歴戦奪斗して利なく、「神皇正統記」にも、「義貞モタビタビメサレシカドモ、ノボリアエズ、サセルコトナクシテ空シクナリヌ」とあるのでもわかるように、当時すでにその威望は大きく傾いていたらしいが、それでも彼の戦死は、彼我の両陣営にとって一つの衝撃であったことは否定できないようであり、その翌月に尊氏の征夷大將軍宣下が実現したのも、彼の死を期として天下の形勢がほぼ定まったことに関係があるだろうとされている（魚澄惣五郎「綜合日本史大系・南北朝」269ページ、中央公論社「日本の歴史・南北朝の動乱」162、3ページ）。義貞敗死の報と尊氏の將軍宣下とは、明暗を異にする対照的な、またいずれも画期的な出来事として、天下の耳目をあつめたものと思われる。

増鏡の作者が、元弘当時の六波羅攻略については、

……をとどし笠置へもむかひたりし治部大輔たかうぢのぼれり。……このたかうぢはいにしへの頼義の朝臣の名残なりければ、もとのねごしはやむごとなき武士なれど……、……この治部大輔、はやうより先帝の勅をうけたまはりてければ……

と、尊氏を当時の官名で記していながら、それにつづく義貞の鎌倉攻めの記事では、

尊氏の末の一族新田小四郎義貞といふ物、いまの尊氏の子四になりけるを……、このころあづまの將軍は……

と、執筆時点を示すらしい「いまの」を尊氏の名に冠して記したのは、やはり尊氏の將軍宣下とその勝利、勢威、義貞のみじめな敗死を強く印象づけられた暦応元、二年のころだったのではなかろうか。

前節（3）で推定したように、「第十六・久米のさら山」の末尾の一節は、建武5（暦応元）年3月から同年8月までの間に書かれたと思われるが、「第十七・月草の花」のかの一節が、これに引き続いて同年8月以後に書かれたとすれば、増鏡の最終の2巻の執筆時期は、すこしも途切れず、前後せずによくつながるわけである。

6.

本稿の冒頭でも触れたように、増鏡は、最終巻「月草の花」の、元弘3年6月、後醍醐帝の京都

還幸（5日）、護良親王の入京・征夷大將軍宣下（13日）の記事を以て完結し、後醍醐帝の建武新政期および南北朝の対立期については、一切触れることなく筆が収められている。この事実も、本書の成立年代の推定上、一考の要がある。

大体、本書の叙述は、先行の歴史物語「今鏡」（高倉天皇代まで）、あるいは今に伝わらない「いや世継」（後鳥羽天皇在位のころまでを記すという）のあとを承けるものであることは、本書の序文によって明らかであるが、巻頭の「第一・おどろの下」で後鳥羽院の治世に筆を起し、次の巻（承久の変を記す）への伏線ともいべき院の歌「奥山のおどろの下を……」を挙げ、「第二・新島もり」で武家政権の発祥と、院の討幕計画に端を発した承久の変、院の隠岐配流の顛末を記したのに対して、巻末では第十四から第十七に亘って後醍醐帝の治世、殊に帝の討幕計画による正中・元弘の変の一部始終を詳叙しているのは、増鏡の政治史としての構成が明らかに意図的であったことを示しており、その点からすれば、本書が北条氏の滅亡と後醍醐帝の新政開始、すなわち後鳥羽院の素志の実現、の記事で終わっているのは、至極当然のことと言える。しかしこれにはつぎのような、なおざりにできない問題がある。

先述のように本書は、元弘3年（1333）または翌建武元年（1334）から、永和2年（1376）までの約40年間の間に成立したのであるが、この40年間（特にその前半）は、史上稀な、全く予断の許されないほどの変転を重ねた全国的規模の大動乱の時期に当る。

ところで、もし本書が、通説のように応安・永和（1368～1374）のころに成立したとすれば、執筆期間をいくら長く見積っても、起筆の時点は、貞治年間（1362～1367）以前にさかのぼることはまずないだろう。貞治とは、本書の最終記事の時点たる元弘3年6月からすでに約30年を経過しており、かの二条良基が、「貞治二のとしさ月の十日、四の海浪しづまり、万の国風おさまれるころ」（「貞治二年御鞠記」）、「貞治六年の春、九城のうち花かうばしく、八島の外風をさまれる時にあひて」（「貞治六年中殿御会記」）と書いたように、建武新政崩壊以後の動乱がほぼ終熄し、北朝・足利幕府の支配権が確立して、天下静謐に帰したころであった。

それは、増鏡の最終巻「月草の花」に、まさに脚光を浴びて登場した諸人物の立場が逆転し、栄枯所を変えてからもすでにかなり久しく時を隔てていた。足利尊氏は後醍醐帝に背き、帝は吉野にのがれ、北朝には光明帝が立ち、護良親王は非命に斃れ、楠木正成・新田義貞は敗死し、後醍醐帝も延元4年（1339）に崩じ、尊氏は先述のように征夷大將軍となって京に幕府をひらき、延文3年（1358）には世を去った。今はすでに北朝後光厳帝・二代將軍義隆の代である。

増鏡の作者がいかなる人物であったにせよ、またその述作の思想的または現実的動機がどのようなものであったにせよ、かの後鳥羽院の討幕運動ではじまり、後醍醐帝の勝利・新政開始で完結する増鏡が、上述の時期に、北朝・足利幕府下で構想され、述作された、ということは、はたして有り得ることであろうか。（増鏡が北畠親房の「神皇正統記」のように、南朝方の貴族や南朝に心を寄せる者の手になった可能性は、本書の内容から言っても、当時の状況からしても、絶無である。この点は、石田吉貞氏も先掲論文で指摘されたところで、今日もはや詳論する必要はなからう）。

これはたとえて言うならば、現代の史家が、昭和3、40年のころに、日本近代（現代）史の著述を思い立ち、明治維新に筆を起し、五・一五事件（昭6）あるいは満洲事変終結（昭7）を以て叙述を打ち切り、その後につづく二・二六事件（昭11）あるいは日華事変（昭12～20）や太平洋戦争（昭16～20）には触れないですますようなものではあるまいか。

増鏡の最初と最終の諸巻の記事内容やその表現の気配と、予断の全く許されないほど紛糾変転した当時の状況とを考え合わせると、本書はまず、後鳥羽院の討幕・王政復古の素志の実現、として後醍醐帝の新政の期間（元弘3年〔1333〕6月～建武3年〔1336〕8月）中に起筆されたであろうと考えられる。

つぎに、もし起筆の時点がそのころであるとすれば、全篇の執筆に要する時日をいかに長く見積っても、擱筆の時期は、それから2、30年も経った応安・永和のころであったとはとうてい思えない。それは、南北両朝が分裂して、その抗争期となり、北朝・足利方の優位、南朝方の頹勢の色がかなり濃くなりかけたところではなかったろうか。岡一男氏は、巻末の『月草のうつればかはる』という歌は、建武中興が間もなく瓦解したことを示唆してゐるやうに思はれる」と言われ、「護良親王らの御還俗に対しても、幾分皮肉の眼で見ているところがある」と評されたが（『日本古典全書・増鏡、解説』）、首肯すべき説であると思う。作者が、

墨染めの色をもかへつ月草のうつればかはる花の衣に

という、おそらくは自作の歌で筆をとどめたのは、「月草の花」に、後醍醐帝京都還幸の記事とともににはなやかに登場する諸人物のことごとくが、あるいは当時とは立場を一変させ、あるいは幽明境を異にすることになり（後醍醐帝中宮禰子元弘3年10月崩、左大臣内覧氏長者二条道平建武2年2月薨、護良親王同年7月横死、足利尊氏同年8月離反、赤松則村同年同月内応、楠木正成延元元年5月戦死、名和長年同年6月戦死、四条隆資同年8月八幡より京師に來攻、後醍醐帝同年12月吉野遷幸、新田義貞延元3年閏7月戦死、尊氏同年8月征夷大將軍宣下、後醍醐帝暦応2年8月崩、「征夷將軍尊氏聞南主崩、先修御仏事」〔続史愚抄〕同年同月、四条隆資、洞院実世とともに新南主後村上を輔翼〔太平記、卷二十一〕同年同月）、元弘の動乱、殊に後醍醐帝の勝利とその新政当時を経験した世人、特に作者が、栄枯盛衰の急激な移り変りに深い感慨を催したであろうころ、すなわち暦応元、二年のころだったのではなからうか。それは、起筆時期と思われる建武初年から3、4年の後に当っており、また前々節（3）、前節（4）で、「つひのまうけの君」云々と、「いまの尊氏」云々の記事を手掛りに、第十六の巻末の一文と、第十七との執筆時期として推定した時期と全く合致するのである。

7. (補 説)

「第十三・秋のみ山」の正中元年（1324）4月の記事中に、つぎのような一節がある。

其廿七日に任大臣の節会行なわる。左大將経忠、右大臣にならせ給。内大臣冬教、左にうつり給へば、右大將実衡内大臣になさる。又の日やがて右大臣殿、大饗行なひ給へば、尊者

に内大臣参給。……。法皇は、今は大覚寺殿にのみおはしませば、大炊御門の式部卿の親王の御家を、内大臣殿申うけて、同日大饗したまふ。尊者には右の大臣、やがて我御家の大饗はつるまゝに、ひきつれてわたり給へり。……

増鏡には、任大臣の大饗に関する記事は、このほかには「第二・新島もり」に、

この内大臣実朝、又右大臣にあがりて、大饗などめづらしく東にて行なふ。京より尊者をはじめ上達部、殿上人多くとぶらひいましけり。……

という一節があるだけであるが、これは格別「大饗」に関する記事というわけではなく、むしろ大饗のあとで起った鶴岡八幡宮での実朝の暗殺事件の記事の序である。

往時、大臣の任命の度毎に大饗が必らず行なわれるとは限らなかったようであるが、それでも「御遊抄」によれば、増鏡が取り扱かう時代範囲内でも、上記の実朝の大饗の承久元年（1219）から正応3年（1290）ごろまでの間に約40回行なわれており、また「続史愚抄」によれば、上記の正中元年の6年前の文保2年（1318）にも行なわれた。それでは一体なぜ増鏡に正中元年の場合だけがとりたててとりあげられたのであろうか。（なお、本稿末尾の「追記」参照）

徒然草の第156段に、

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常の事なり。宇治左大臣殿は東三条殿にて行はる。内裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。……

という記事がある。これは、大饗の行われる場所を問題にしている点、前掲の「秋のみ山」の記事との類縁性がきわめて濃厚で（増鏡の場合は、「大炊御門の式部卿の親王の御家」は後宇多法皇の洛中の御所であったが、記事の当時は法皇は嵯峨の大覚寺殿に住んでいたので、同邸を大饗の場所として「申しうけ」るのに、法皇に他所への御幸を乞う必要がなかったことを言っており、徒然草の、「……内裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり」、にぴったり対応している）、私はこれを私の増鏡作者兼好説の論拠の一つとするのであるが、それはさて置き、私はこの徒然草156段の記事は、増鏡に記された正中元年の時以後中絶していた大臣の大饗が、建武2年（1335）2月16日に11年ぶりに催されたところに執筆されたであろうと考えている。

そこで、増鏡のかの記事が書かれたのも、やはりこの建武2年のころだったのではなかろうか。というのは、「御遊抄」の「任大臣」の部に、

自正中二年至建武元無大饗。建武三《二ノ誤リ》年改有内大臣饗。無御遊。自建武三至永徳元四十六年。絶而無饗。今年再興。

という記事があって、大臣の大饗は建武2年以後ふたたび中絶して、永徳元年（1381）まで46年間1度も行なわれなかったことがわかり、増鏡の執筆年代範囲（元弘3年〔1333〕～永和2年〔1376〕）においては、大饗が行なわれたのは、この建武2年の内大臣一条経通のそれ（「続史愚抄」）がただ1回だけであったからである。前述のように、一般的には、大臣の大饗は、特にとりたてて記事にするほどの異例の出来事ではない。したがって、かの正中元年の近衛経忠・西園寺実衡の大饗が記事にとりあげられたのは、作者が「秋のみ山」のあたりを書いていたちょうどそのころに、めづら

しくも大饗が行なわれたので、先例を思い起して書きつけたものであらうと思う。私の増鏡作者兼好説から言うならば、かの徒然草 156 段は、「秋のみ山」の記事のついでに、余録的に、メモ風に書きとめておいたもの、ということになる。

(私は、増鏡の作者は兼好であり、徒然草の第 31 段から第 170 段前後までの中に含まれている宮廷関係記事の章段は、増鏡の執筆中に、その余録、こぼれ話として書きとめられたものであらう、と考えており、それについては「徒然草と増鏡」(『文学』昭 48. 11 月号所載)で詳述したが、もしこの推定を前提にするとするならば、増鏡の執筆・成立年時の問題に関しても、そこから多くの示唆を得てくることができる。一つだけ例をあげると、増鏡の「第一・おどろの下」に、後鳥羽院が、その妃修明門院《重子》の有職ぶりに感服し、近習の「なにがしの中将」の認識不足を指摘した、という記事があるが、これは、徒然草第 48 段の、後鳥羽院がその院司「光親卿」の有職に「かへすがへす感」じ入り、女房たちをたしなめた、という記事と内容が酷似している。そして私は、この徒然草 48 段は、承久の変における光親《後鳥羽院の討幕計画をしばしば諫止して容れられず、ついにやむなく討幕の宣旨を草した。変後捕えられて鎌倉への護送の途次、駿河国で斬られた》と、きわめてよく似た役割を果し、全く相似た運命を辿った元弘の変における後醍醐帝の近臣源具行《討幕の兵士徴集の宣旨を草し、変後鎌倉へ護送の途中、元弘 2 年 6 月近江国で斬られた》の刑死の報を聞き知った兼好が、先例たる承久の変の光親を思い起して、その逸話を書きとめたものであらうと推定した(『中世文学・第 18 号』参照)。しかしこれは、つぎのように言い直すべきであらう。すなわち、兼好は、元弘 2 年 6 月以後の或の時点《それはおそらく 1 年後の元弘 3 年 6 月の後醍醐帝の復位・新政開始の後間もないころであったと思われる》で、増鏡の稿を起し、かの「おどろの下」の記事を書き進めていた時、徒然草 48 段の記事をメモ風に書きとめておいたのであらう、と。だがこれらのことは、すべて、増鏡と徒然草の成立事情の問題として、別の機会に改めて考察したい)。

8.

以上の考察の結果を要約すると、

- 第十二・うら千鳥(「近きことは人皆御覧ぜしかば」)……………建武初年ごろ
- 第十三・秋のみ山(「右大臣殿、大饗行ひ給へば」)……………建武 2 年ごろ
- 第十四・春の別れ(「このほど世にひろまれる」)……………建武 2 年ごろ
- 第十五・むら時雨(「このうちに御覧じたる人もおはすらん」)……………建武 2 年ごろ
- 第十六・久米のさら山(「終のまうけの君にてこそおはしますめれ」)……………建武 5 年 3～8 月
- 第十七・月草の花(「いまの尊氏」)……………建武 5 年 8 月ごろ

ということになる。増鏡巻末の第十二～第十七の各巻に連続的に執筆年時徴証が見出されたのは、いわば偶然であって私の作為によるものではないが、それはともかくとして、第 5 節で述べた

ように、本書の起筆が、後醍醐帝の新政期間（元弘3年6月～建武3年8月）中になされたとなると、冒頭から第十五・むら時雨のあたりまでは、元弘3年後半または建武元年前半ごろから、建武2年へかけての約2年間に執筆されたらしく思われる。

そうすると、第十六と第十七の2巻が、それから2、3年の間を置いて建武5（暦応元）年に執筆されたとみられる点は、どのように解釈すべきであろうか。

ここでは詳論の余裕がないが、増鏡の内容をつぶさに検討すると、この書は、表向きは「栄華物語」や「大鏡」以下の「歴史物語」の先例に倣って鎌倉期の宮廷中心の歴史を叙述するものではあるが、実は決して政治的に中立局外の立場から述作されたものではなく、当時の公家の一権門西園寺家の家門史ともいべき性格を裏面にそなえていることに気付かされる。私は、増鏡は、宮廷史を表向きとしながらも、実は元弘・建武のころの西園寺家のために、同家150年の興隆繁栄の跡を記述し、禁裡へ進上して天皇（後醍醐）の覧覧に供し、「建武新政」を開始した天皇の恩顧を希い、同家の昔日の勢威の回復に資そうとしたものであらうと考える。（はじめは光厳朝の成立時に企画され、のち状況の変化に伴って進上先を改めた、とみることも可能であるが、しばらく上記のように考えておく）。

元弘・建武期の西園寺家の当主公宗（元徳2年〔1330〕権大納言。嘉暦元年〔1326〕以来「関東申次」）は、元弘の変勃発の直前の元徳3（元弘元）年3月、その北山第に天皇・中宮（禧子。公宗の大叔母に当る）の行幸・啓を迎えるなどしたが（「増鏡・むら時雨」）、事変後、後醍醐帝が退位し、光厳天皇の登極を見てからは、持明院統光厳朝に若くして重きをなした。先帝の隠岐遷幸に当っては、幕府の指示に従って、帝に随従した内侍三位所生の3皇子（恒良、成良、義良）を預ったりもしている（「久米のさら山」）。

しかし、元弘3年4月の足利尊氏の六波羅攻めに際しては、光厳帝、後伏見・花園上皇らの東国落ちには扈從せず、単独で北山第にかえり（「月草の花」）、はやくも新事態に対処する方策を講じはじめたもののようである（公宗の室名子の作「竹むきが記」、参照）。

ついで彼は、後醍醐帝の復位後の6月12日には一旦権大納言を辞したが、2月後の8月15日には還任し、11月には元のように中宮大夫を兼ねることにもなった（「公卿補任」）。以後、建武2年8月のその死まで官職は変らなかったが、建武の新政府の諸機関にはなんら重用された形跡がなく、おそらく失意と焦燥の日を送っていたであらう。彼を後醍醐帝に結びつける絆であった中宮（皇后）禧子は、皇男子を生むことなくすでに元弘3年10月に崩じていた。「太平記・巻第十三」には、「公宗不肖ノ身ナリトイヘドモ、故中宮ノ御好ニ依テ、官禄共ニ人ニ不下、是偏ニ明王慈恵ノ恩幸ナレバ………当家数代ノ間、官爵人ニ超ヘ、恩禄身ニ余レル間………」、という、後に公宗が逮捕された時の陳弁の辞を挙げているが、真否はともかく、当時の公宗の心境を忖度するには甚だ示唆的である。

そこで増鏡は、この時期すなわち元弘3年6月から建武2年までの間において、公宗に親昵していた或る人物によって、後醍醐帝に進上すべく、着想され、執筆されたものと推定される。後鳥羽

院の承久の変にはじまり、元弘の変の後醍醐帝の勝利を以て終る本書の構成と内容、また本書全篇に一貫してうかがわれる武家・武家政治に対する作者の批判的姿勢等も、このことを裏付けているようにみえる。

だが建武2年6月22日、公宗は実弟権中納言公重の後醍醐帝への密告によって、叛逆の疑いで逮捕され、同年8月2日には遂に誅されるという悲運に遭った。このころ北条時行が信濃に兵を起し、鎌倉を攻めて足利直義を破り（7月）、護良親王はこの時直義に殺され、尊氏は時行討伐を名として関東に下り、鎌倉を回復したのちも帰京せず叛意を明らかにし、ここに建武新政は破れ去り、再び動乱の時代となる。翌建武3年1月、後醍醐帝は叡山に拠り、8月には尊氏は光明天皇を擁立し、後醍醐帝は12月21日吉野に遷幸して南北両朝の分裂・抗争期を迎えた。

前述の増鏡の第十五までと、第十六巻末および第十七との執筆時期徴証の断層は、これらの状況、特に公宗の刑死と後醍醐帝の蒙塵によるもので、作者はこの時（建武2年8月～同3年）、述作の目的を見失い、第十六の巻末近くまで書き進めていた筆を、一旦置いたのではなかったろうか。

つぎに、それでは第十六の末尾の一節と第十七とが建武5（暦応元）年の後半ごろに書かれたらしい点は、どのように考えるべきであろうか。

公宗が誅された後、西園寺家の名跡は弟公重（前出）が継ぐことになり、公宗の室名子は北山第を逐われ、逆境に沈むことになったが、やがて公宗の遺児実俊を生んだ（「太平記・巻第十三」）。名子の「竹むきが記」の、

暦応二とせにもなりぬ。前右大臣殿いたはり給ことおはしつる、同正月にうせ給ぬる、いとあへなくあはれになん。かゝるに家門の事、いとわづらはしきことどもありしかど、なることなくしづまりぬ。ことしは深批ぎあるべきを……………（「前右大臣殿」は菊亭兼季。公宗の大叔父）

という記事によれば、暦応元年に、当時4才の実俊の西園寺家々督相続についてのもめ事があったが（おそらく叔父公重との間で）、すでに北朝の世となっていたこととて、結局実俊が同家を継ぐことになったようである。実俊は建武4年10月には3才で従五位下に、また暦応2年正月には5才で正五位下に叙せられている（「公卿補任」）。

他方、第4、5節で詳述したように、暦応元年の後半は、北朝・尊氏方の優勢がほぼ決定的となった時期で、8月11日尊氏の征夷大將軍宣下、同月13日興仁親王（後の崇光帝）の春宮立坊等のことがあった。

そこで、おそらくこの時期に、増鏡の作者は、一旦失われた目的が、新たな状況の下によみがえったことを感じ、実俊の、また従って西園寺家の将来のために、ふたたび筆を執ってかの「第十六・久米のさら山」の末尾の一節と、「第十七・月草の花」とを書き継ぎ、増鏡全篇を完結させたのであろう。

なお、上のことに関連して指摘したいことは、名子の「竹むきが記」は、その記事内容の年時か

らいて二つの部分に分れ、第1部は、元徳元年(1329)12月28日、時の春宮量仁親王(後の光厳帝)の元服の記事にはじまって、元弘3年(1333)6月——公宗の官職辞任の時点にあたる——の記事で終り、第2部は建武4年(1337)12月21日の実俊の真魚(まな)の儀式的記事——そのすこしあとに、前掲の暦応2年の「家門の事」云々の記事がつづく——ではじまり、貞和5年(1349)春(この時実俊は参議を経ずに権中納言に直任された)の記事で終わっている、ということである。第1部と第2部の間の約4年間の時間的断層は、公宗と名子の、不遇・悲運・逆境の期間に当ており、上述の増鏡の執筆時期の断層もほぼこれに合致する。

また、兼好の徒然草は、私の推定するところでは、諸段の執筆年時からいて3群に区分されるが(「中世文学・第18号」所載「徒然草諸段執筆年時考証」等参照)、その第2群(本稿第6節で述べたような増鏡の「余録」的な記事の章段はすべてこの第2群に含まれている)は、元弘元年(1331)から建武3年(1336)までの間に執筆されたものらしく、第3群(貞和2、3年から貞和5年春までの間に執筆された章段が数多く含まれている)の執筆時期との間に、すくなくとも数年の断層があり(「国語と国文学・昭和48年2月号」所載「徒然草の執筆年代について」参照)、これもまた増鏡の執筆時期の断層にほぼ合致する。

以上の2点を、私は決して偶然のこととは思わない。それはむしろ、増鏡と徒然草と竹むきが記という、いずれも南北朝時代初期の暦応元年(1338)から貞和5年(1349)までの約10年間に成立した三つの著作(また従ってその作者たち)が、たがいに切っても切れない関係にあったことからくる必然的な結果であろう。この問題については、先掲の「兼好と名子」「徒然草と増鏡」およびその他の拙稿を参照していただければさいわいである。

追記

「第十三・秋のみ山」の「中宮内侍、後に准后ときこえにき」は、中宮内侍すなわち新待賢門院廉子が、建武2年4月26日に准三宮となっているので、この時以後の筆になることは明らかであるが(佐成謙太郎「増鏡通釈」)、私見ではこの時をあまり遠ざからぬころ、すなわち建武2年後半か建武3年前半のころ(後醍醐帝吉野蒙塵以前)に書かれたであろう。また、「女院小伝」には、「新待賢門院藤廉子。……興国年月日為皇后宮於南山乎。正平六十二廿八院号。……」とあるから、件の記事は、興国年間(北朝年号の暦応3年から貞和元年まで。1340~45)以前、またはすくなくとも正平6年(観応2年、1351)以前に書かれたと考えてよからう。正平6年12月の「院号」は、神器が南朝側に渡った直後に、「国母」(後村上天皇生母)として宣下されたもので、「増鏡」の作者もこれを十分知り得たはずである。したがってもし件の記事がこの時以後に書かれたとすれば、「新待賢門院」という院号が、「准后」に代って記されていたに相違ない。「准后」とだけあるのは、この時以前の筆であることを証するものである。